

自由談話における接続助詞ケド

—接続機能と談話展開の関わりについての考察—

永田良太

(2001年9月28日受理)

Relationship between the conjunctive function of Japanese conjunction *kedo* and its influence to the discourse development : A case of free talk

Ryota Nagata

A large number of studies of Japanese conjunction *kedo* have discussed that what kind of use the conjunction *kedo* has and the features of each uses. On the other hand so far little attention has been paid that how each uses of *kedo* influence to the discourse development. The purpose of this paper is to clarify the relationship between the conjunctive function of *kedo* and its influence to the discourse development by observing whole discourse of free talk. This paper clarifies that the use of conjunction *kedo* is different from other uses of *kedo* with respect to the influence to the discourse development, and that the differences are derived from the differences of the type of "denial" in each uses.

Key Words: Topic structure, Conjunctive function of *kedo*, Discourse development

キーワード：トピック構造、接続助詞ケドの接続機能、談話展開

0. はじめに

永田・大浜(2001)では、従来指摘されてきた接続助詞ケドの逆接、対比、前置き、提題、挿入、終助詞、という六つの用法は「否定」される想定の種類と「否定」のされ方によって決定されるという連続的な関係にあることを明らかにした。では、連続的な関係にあるそれらの用法は談話展開上も類似した働きをするのであろうか。あるいは分化の仕方の違いによって、談話展開上の働きにも違いが見られるのであろうか。

接続助詞ケドの談話レベルの働きについて明らかにしようとした数少ない研究に、先行情報との関わりから考察を行った山崎(1998)があるが、そこで着目されているのは談話の一部であり、接続助詞ケドが談話展開にどのように関わるかについて十分に明らかにされているとは言えない。本稿では「自由談話」というタイプの談話の全体を視野に入れ、このタイプの談話展開に接続助詞ケド¹⁾がどのように関わるかを明らかにする。

1. 分析資料について

本稿で分析資料として用いたのは2000年の11月20日から2001年の2月27日の間に広島大学で採集された12の自由談話である。参加者は22才から30才までの大学院生もしくは大学職員であり、それぞれ面識のない同学年の同性、または異性の相手と30分程度会話してもらったものである。会話はテープレコーダーが回り始めた後に始められ、時間がきたら適当に会話を終結させるよう片方の参加者に指示が与えられた。

2. 自由談話の構造

橋内(1988)が指摘するように、会話にはトピックが存在し、トピックをめぐって会話は展開していく。村上・熊取谷(1995)は本稿と同じく自由談話を分析し、会話におけるトピックの特徴として、会話のトピックは構造をなしており、いくつかの小トピックがさらに大きなトピックを構成すると指摘する。村上・熊取谷(1995)が分析したのは友人同士や姉妹の談話であったが、そのような視点で観察すると、本稿で分析した初対面の者同士の談話も構造化されていることが分かる。

談話を観察してまず気がつくことはその開始部分が類似しているということであり、12談話中10談話において、具体的なトピックが開始される前の準備段階に相当する部分（開始部）が認められた（一(1)）。²⁾

(1)A: はじめまして

B: はじめまして、ふふふ

A: こんにちは

B: Aさんですか

A: あ、{あ} Aといいます、はい、よろしくおねがいします

B: よろしくお願ひします、[えー] 私Bと{Bさん}申します、はい

また、会話が終結する部分に関しても共通の特徴が見られた。Schegloff&Sacks (1972) が指摘するように、会話の終結は単に「さよなら」と言うことによって成立するものではなく、それ以上会話を続ける意思がないことを示す先終了句がまず提示され、その後、会話の参与者達の協力のもとに最終交換に至る。

(2)B: なんか聞いたことない言葉がいっぱい {うん}

出てきて、うん、{あー} 英語もでした

A: はい、じゃ、またいつか、[ふふふふふ]、せつかく、{いや、[ふふふ]、そうですね} はい、せつかく知り合えたので

B: はい、{はい} はい、えっと、A、A、

A: Aです {名前 [ふふふふふ]}、あ、名刺持ってくれば良かったな、ま、いや

B: あ、持ってるんですか

A: はい

B: Aさん

A: はい

B: はい

A: Bさんです {はい} よね

B: 以後、お願ひし {あ} ます

A: よろしくお願ひします、あ、じゃあ、今日本当ありがとうございました、{はい} 楽しか {ありがとうございました} ったです、はい {はい}、じゃ {はい}、失礼しま {はい} す

上の例(2)においては下線部の発話(先終了句)によって、Aにそれ以上会話を続ける意思がないことが示されて以後、人間関係の維持に関するやりとりがなされ、最終交換へと至っている。このような会話の終結に関する部分（終結部）がすべての談話に見られた。

また、トピックが具体的に展開される部分（主要部）に関しても共通の特徴が見られた。村上・熊取谷(1995)と同様、あるトピックから次のトピックへの移行の際には、全く新しいトピックへと移行する新出型(一(3))、関連するトピックへと移行する派生型(一(4))、それ

前のトピックについて再び言及される再出型(一(5))という三つの型が認められた。

(3)B: F先生は方法学 {あー}、やし {うん}、K先生は経営学

A: [ふふふ] 全然わかってない、教育なのに {うん}、そうなんや {うん}、行政とはまた違う

B: うん

A: はーそっか

B: そうね

A: [はー、ふふふ、はー] ご趣味は、[ふふふ]、{ご趣味は、[ふふふ] {ご趣味}、[はー]

B: ご趣味、あの、世間的には、ふふ、世間向けには {向けには}、なんやろ、[ふふ] 一応こう旅とか言うんじゃけど、{うん、た、旅} そ、そんなしてねえなあ、[ふふふふ]

上の例(3)は新出型の例であるが、例(3)においては「Bが所属するコース」についてのトピックが終了し、続いて下線部の「ご趣味は」というAの発話によって「趣味」という全く新しいトピックが開始されている。

次に派生型の例を見る。例(4)においては留学経験のあるAが中心となり「留学先での生活」というトピックが展開されているが、下線部のBの発話をきっかけとして「留学するときの携帯品」という、同じく留学に関係するトピックへと移行している。

(4)A: やっぱり愚痴言える相手がいないと辛いと思ひますよ

B: がーん、[ふふふふ] そっかー

A: なんかEメールとか {うん}、うん、で、パーッとしょっちゅう、結構筆まめになりますね、留学とかすると

B: はーそっかー

A: えー

B: なんか持ってって {うん}、持ってったらいいものとかあるのかな?

A: 持ってったらいいもので、意外と向こうでも買える、ある程度ニュージーランド、オークランドとかだったら {うん}、なんか日本の食料品店とかもあるとか話聞いて {うん}、で、なんか調味料とか意外と持ってたら便利ですね

最後に再生型の例であるが、例(5)においてはBの出身地である「滋賀県」についてのトピック(下線部①)から「調査」、「Aの出身大学」というトピックへと移行し、その後、下線部②のAの発話で再び「滋賀県」についてのトピックへと移行しているのが分かる。

(5)A: 滋賀県、あの一、どこら辺ですかね、って聞いてもわかんないかも {[ふふふふ]} しれないけど、知り合いが一人だけいるから①

- B: 大津なんですけどね①
 A: あー、よく分からないけど {〔ふふふ〕}、聞いたことはあるんで、聞いたこと、うーん①
 B: これは何でこの調査やってって言われたん?
 A: いや、あの一、研究室の先輩から {やっぱそうなんや}、M1、M1しかだめって言われて {うん}、で、なんか、行ってくれないって言われたから
 B: なんやろか、この調査

 A: あの一市内の、S大学から
 B: あ、S大学
 A: ええ
 B: あー
 A: え、知ってるんですか?
 B: 知ってますよ {あー}、友達がアイスホッケーやってて {あ、アイスホッケー}、Sとアイスホッケーの試合しとったん見たことあるし
 A: あー
 B: へー
 A: そっかー、滋賀は一回しか行ったことないんですけど、ちょうど冬行っただんで、すごい寒かったような気が {あー}、うん②

自由談話はどのように展開するかを予測することが難しいというタイプの談話であるが、観察してみると、それらは決して無秩序に構成されているわけではなく、構造化されたものであることが分かる。本稿で用いた自由談話の構造を図示すると次のようになる。

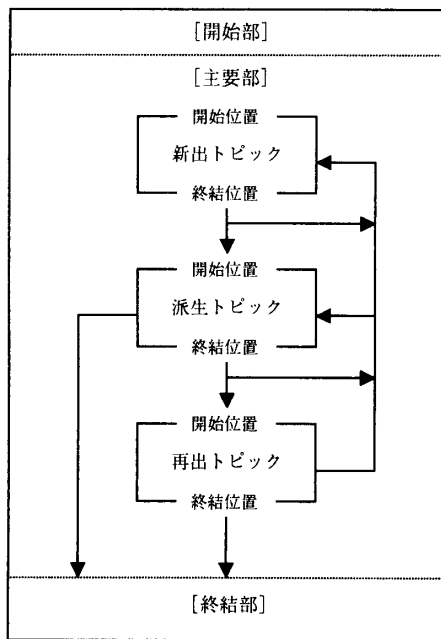


図1 自由談話のトピック構造

以下においては、まず、接続助詞ケドの各用法がこのようなトピック構造のどこに現れるかについて明らかにし、そこから接続助詞ケドの各用法が談話展開にどのように関わるかについて考える。

3. 自由談話におけるケドの出現位置

接続助詞ケドが図1に示した自由談話のトピック構造中のどの位置に現れるかを調べたものが表1である。なお、どこまでを一つのトピックとして見なすかについては分析者によって異なる可能性があるため、筆者以外の分析者2名³⁾に、トピックの開始や終結に見られる言語表示(村上・熊取谷 1995参照)やトピックを構成する語彙の意味的連関性(杉戸・沢木 1979参照)といった分析基準について説明を行い、トピックの認定を行ってもらった。()内の左側の数字が分析者Xの判断に基づくものであり、右側の数字が分析者Yの判断に基づくものである。

表1 接続助詞ケドの出現位置別の出現数

開始部	主要部			終結部
	開始位置	主要位置	終結位置	
9(10/15)	31(44/25)	624(583/618)	31(58/30)	1(1/8)

表1を見ると、接続助詞ケドはトピック構造の各位置に見られるが、各用法別にさらに詳しく見てみると、その現れ方は一様ではないことが分かる。各用法別に出現位置を調べたものが表2-1から表2-6である。

表2-1 逆接用法の出現位置別の出現数

開始部	主要部			終結部
	開始位置	主要位置	終結位置	
0(0/2)	0(1/0)	58(54/58)	2(5/0)	0(0/0)

表2-2 対比用法の出現位置別の出現数

開始部	主要部			終結部
	開始位置	主要位置	終結位置	
0(0/0)	0(2/1)	41(40/40)	2(1/1)	0(0/1)

表2-3 前置き用法の出現位置別の出現数

開始部	主要部			終結部
	開始位置	主要位置	終結位置	
4(5/5)	22(29/17)	349(324/350)	22(39/22)	1(1/4)

表2-4 提題用法の出現位置別の出現数

開始部	主要部			終結部
	開始位置	主要位置	終結位置	
0(0/0)	7(5/5)	50(51/52)	0(1/0)	0(0/0)

表2-5 挿入用法の出現位置別の出現数

開始部	主要部			終結部
	開始位置	主要位置	終結位置	
0(0/0)	1(2/0)	22(21/22)	0(0/1)	0(0/0)

表2-6 終助詞用法の出現位置別の出現数

開始部	主要部			終結部
	開始位置	主要位置	終結位置	
5(5/8)	1(5/2)	104(93/96)	5(12/6)	0(0/3)

例えば、トピックの開始位置に前置き用法や提題用法は現れるが他の用法はほとんど現れないというように、出現位置に関して、用法間には違いがあることがこれら六つの表から分かる。では、このような出現位置の違いは何を意味するのであろうか。

Schegloff&Sacks (1972) は会話の参与者達は常に「なぜいまこの発話が行われるのか」ということを意識していると指摘する。このことは換言すれば、話し手は自らの目的を達成するために「いま」どのような発話を行えばよいかを考え、また、聞き手はなぜ「いま」この発話が行われたかを考えながら会話を行っているということである。このようなことを踏まえれば、表2-1から表2-6で得られた結果は、各用法が談話展開上どのような働きをするものとして参与者達に認識されているかを反映していると考えられる。以下では上の表2-1から表2-6をもとに、接続助詞ケドの各用法が談話展開にどのように関わるかについて考える。

4. 接続助詞ケドの各用法と談話展開との関わり

4-1. 逆接用法と対比用法について

表2-1と表2-2から分かるように、逆接用法と対比用法は構造中における出現位置が類似している。これらが他の用法の現れ方と異なる点はトピックの開始に関わる位置にほとんど現れないという点であり、このことは3名の分析者に共通している。では、なぜ逆接用法や対比用法はこのように特徴的な現れ方をするのであろうか。

ここで、これらの用法の前件と後件との間にどのような関係が成立しているかに目を向けると、これらの用法はいずれも、次の図2のように、前件から顕在化する想定が後件によって棄却されるという特徴を持つ(永田・大浜、2001参照)。

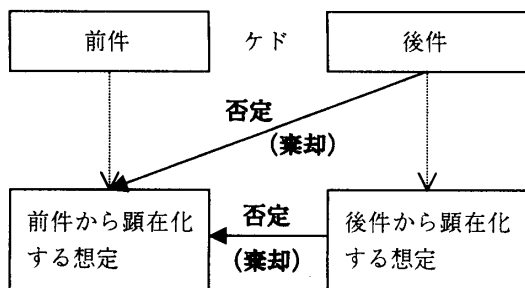


図2 逆接、対比用法の「否定」関係

また、永田・大浜(2001)で述べたように、そのような過程が成立するためには前件の解釈時に、後件で棄却される想定呼び出し可能性が高められていなければならない。表2-1、表2-2で得られた結果はこのように逆接、対比用法の特徴を反映していると言え

る。例えば、次の例(6)のようにトピックの途中に現れる場合には、前件に付随する知識が既に活性化されているため、後件で棄却されるような想定も呼び出されやすい状態になっていると考えられる。

(6)A: お、あいつ面白いんよ、〇〇の大学院を{うん}受けて、受かったんよ、受かったんだけど、なんか、自分は、なんか音楽の方がやりたい
 B: ふーん
 A: で、なんか作詞とかしよったんよ
 B: へー
 A: で、自分で詞つくつ{うん}、歌詞作って、なんか、そういうオーディションじゃないけど、なんかそんなんに出して、で、結構審査員の人にほめられたり{うん}とかね、そっちの才能あった奴な{へー}んよ、で、なんか東京行って音楽の勉強すると{あー}かって言って、院をけつ{あー}て、東京の専門学校に走ったけど{うん}、結局就職先を見たら学習塾という、[ふふふ{はー}ふふ]なにしよん、お前はって
 B: いま東京で就職しとる?

A: 東京で就職して{あー}そうなんじゃ、うん
 例(6)においては、話題の人物であるCくんには音楽の才能があったことが先行情報として与えられている。そのような文脈で前件の「音楽の勉強をするために東京の専門学校に行った」は「Cくんは音楽活動をしている」という想定を顕在化させると思われるが、そのような想定は後件の「就職先は学習塾である」によって棄却されることになる。このように、トピックが具体的に展開される途中においては後件によって棄却される想定呼び出しが容易であると言える。

一方、相手がどのような知識を持ち、どのようなことを考えているかが互いに分からない会話の開始部や、それに関する想定がまだ呼び出されていない状態であるトピックの開始位置において、後件で棄却されるような想定呼び出すには多くの労力を要することになる。

このように、逆接用法や対比用法に特徴的な現れ方はこれらの用法の「否定」のあり方と密接に関わるものであると考えられる。

4-2. 前置き用法と提題用法について

表2-3を見て、まず、気がつくことは前置き用法の出現数が他の用法と比べて圧倒的に多いということである。前置き用法のケド節は社会的ルールへの配慮や伝達性への配慮から提示されるものであるが(才田・小松・小出 1984参照)、表2-3に示されるような出現数の多さから、本稿で分析した自由談話においては、コミュニケーションの円滑化に特に注意が払われ、談

話が展開されていることが分かる。

次に出現位置に関して、表2-3と表2-4から分かるように、前置き用法や提題用法は逆接、対比用法には見られなかったトピックの開始位置に見られる。これは逆接、対比用法と前置き、提題用法とでは「否定」の関係が異なるためであると考えられる。

永田・大浜(2001)で述べたように、前置き用法と提題用法はともに、当該文脈で後件を発話した場合に生じるであろう想定を前件が「抑制」するというかたちで「否定」の関係が成立するものである(一図3参照)。これらの用法が開始位置に見られるのは、話し手が新たなトピックを導入するに際して、「抑制」すべき想定が生じるであろうことを見越して、それに配慮した結果であると考えられる。

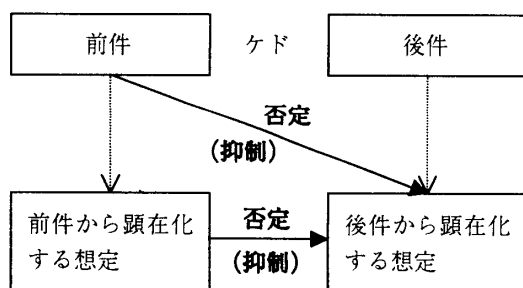


図3 前置き、提題用法の「否定」関係

ただし、同じく開始位置に現れながら、両者にはトピックの性格に関する違いが見られ、前置き用法が新出、派生、再出のいずれの型の開始位置にも見られるのに対して提題用法は新出、派生の場合には現れるが再出型の場合には見られなかった。これは再出型の場合にはそれ以前に一度トピックとなっており、わずかな手がかりで再び呼び出すことが可能であるためであると考えられる。

例えば、例(5)の下線部②のケド節は前置きの働きをするが、同時にその中に含まれる「滋賀は」によって前出の「滋賀」についてのトピックに戻ることが示されている。即ち、ここでのケド節は後件から顕在化するであろう想定を「抑制」と同時に、トピックの関連性についても示す働きをしていると言える。このように、わずかな手がかりで再び呼び出すことが可能な状況において「さっきの滋賀の話ですけど」といったケド節をさらに付加すれば、処理に要する労力のみが増すことは明らかであろう。トピックに関わる働きをする提題用法が再出型の開始位置に見られないのは、このような、再出型に特有の「トピックの呼び出されやすさ」のためであると考えられる。

このように、同じくトピックの開始位置に現れながら、前置き用法と提題用法にはトピックの性格に関する違いが見られるが、出現位置に関しても両者には違

いが見られる。表2-3と表2-4から分かるように、3名の分析者に共通の判断として、開始部や終結位置に提題用法はほとんど見られない。この違いは提題用法において「抑制」される想定がトピックに関する想定に特定されているということと密接に関わると考えられる。

まず、会話の開始部に見られないのはこの部分が具体的なトピックが開始される前の準備段階という性格を持つために、トピックに関する想定を「抑制」を必要とするような発話が行われなかったためであると考えられる。では、終結位置に見られないということに関してはどうであろうか。

橋内(1988)が指摘するように、会話のトピックは常に頓挫してしまう危険性を持ち、事実、本稿で用いた自由談話においては自由に次のトピックへの移行が見られた。では、なぜ提題用法が提示された場合に、その受け手はそれに関するトピックを続けようとするのであろうか。ここで注目すべきは提題用法の働きがトピックに特定されているということである。即ち、提題用法のケド節は当該文脈で後件が解釈された場合に生じるであろうトピックの関連性に関する想定を「抑制」するために提示される。このことは換言すれば、提題用法の場合には話者が特にトピックの関連性に注意を払っているということである。そのように相手がトピックの関連性に配慮して導入した事からを一方的に終結させ、別のトピックへと移行することは相手のポジティブフェイスを侵すことになることであるであろう。終結位置に提題用法が見られないのはこのような理由によるものであると考えられる。

以上、見てきたように、同じく後件から生じるであろう想定が「抑制」される前置き用法と提題用法であっても、どのような想定が「抑制」されるかによって出現位置やトピックの性格に関する違いが見られる。

4-3. 挿入用法について

永田・大浜(2001)において、挿入用法は、発話の途中という特殊な位置に用いられるが、機能的には前置きや提題用法と同じ働きをするとして述べたが、本資料中に現れた23の挿入用法を観察してみても、文の途中に挿入されているケド節を文頭に移動すると前置き、あるいは提題用法となり、逆接や対比用法となるような挿入用法は見あたらなかった。

このように挿入用法は前置き、提題用法と密接に関わるが、談話中の出現位置に着目すると、前置きや提題用法とは異なる現れ方をしている点もある。表2-3、表2-4と表2-5を比べてみると、前置き用法や提題用法とは異なり、挿入用法はトピックの開始位置にほ

とんど見られないということが分かる。

挿入用法は話し手が必要と感じた時点でケド節を挿入するものであるが、そのような挿入用法がトピックの開始位置に見られないのは、話し手が新たなトピックの導入に特に注意を払っていることの表れであろう。

会話に新たに導入されたトピックはそれがトピックとして定着するという保証も、その後、自らの望み通りに展開していくという保証もない(橋内 1988参照)。従って、新たなトピックが導入される際には、そのトピックの定着、発展を阻害する想定が顕在化する可能性の有無に特に注意が払われることになる。そのように「抑制」すべき想定の有無が特に慎重に予め検討されるために、思いついたところでケド節が提示されるという挿入用法はトピックの開始位置にほとんど見られないと考えられる。

いま、トピックの開始位置においては「抑制」すべき想定の有無に特に注意が払われると述べたが、このことを確認するために、挿入用法と同様、ケド節が文頭に置かれぬ次の例(7)のような場合について見てみる。ケド節が独立的に用いられる場合、挿入用法のように文の途中に置かれる以外にも、例(7)のように文の終わりに置かれることがある。

(7)A: [ふふ、] あーそっか、いいねー、そっかー、ふーん、中、中どうなってるの、なんか東京タワーみたいに土産屋さんみたいなものがある、そうじゃなくて展望台

B: あー、{あ} あるある、て、展望台もあって、あのね、東京タワー真ん中から登る、やろ、{うんうんうん} 俺東京タワー登ったことないけんわからんけど

A: [ふふふふふ、] 多分、うん

B: うん、エッフェル塔なんか、こう、こんななつとるやん

A: うん

B: こんなところから登るんよ、[ふふ、]

A: あー、こう足浴いに登るって感じ

B: そう、そう、そう、そう

表2-1から表2-4のケドのうち、このように後置的に用いられているものについて、その出現位置を調べたものが表3である。

表3 後置的なケドの出現位置別の出現数

	開始部	主要部			終結部
		開始位置	主要位置	終結位置	
逆接	0	0	3	0	0
対比	0	0	4	1	0
前置き	1	4	94	11	0
提題	0	0	0	0	0

表3を見ると、トピックの開始位置に現れる後置的なケドは前置き用法において見られるが、その数は後置的な前置き用法のケド110例中、わずか4例であり、ここからも、トピックの導入に際して「抑制」すべき想定の有無に特に注意を払うという話し手の姿勢がうかがわれる。

また、表3から、挿入用法の場合には見られなかった逆接用法や対比用法が後置的に用いられる場合には見られるということが分かるが、これは逆接用法や対比用法の「否定」のあり方と関わると考えられる。先に見たように、逆接用法も対比用法もいずれも前件から顕在化する想定が後件によって棄却されるという特徴を持つ。つまり、逆接や対比用法が成立するためには棄却するものとされるものが存在しなければならない。従って、挿入用法の場合のように、棄却するものがまだ完全に提出されていない場合には、そのような棄却の過程が成立しないために逆接や対比用法が見られないと考えられる。

一方、前置き用法の場合には後件から顕在化する想定が前件によって「抑制」されるため、後件の発話中、あるいは発話後など思いついたところでケド節を提示することが可能である。ただし、同様の過程を持つ提題用法に関しては後置的なものが見られなかったが、これは、トピックの関連性というのは発話解釈の上で処理労力の面からも重要な意味を持ち、話し手もそのことを意識しているためであると考えられる。挿入用法23例のうち、挿入的な提題用法の数が2例のみであることもそのことの表れであろう。

4-4. 終助詞用法について

永田・大浜(2001)で述べたように、終助詞用法は前置き用法や提題用法と密接に関わるが、表2-6を見ると、前置き、提題用法と異なり、トピックの開始位置における出現数が少ないことが分かる。このことについて考えるために、ここで接続助詞ケドの終助詞用法と turn-taking との関係について見ておくことにする。

接続助詞ケドの終助詞用法と turn-taking との関係については、永田(2001)において、「車販売」というタイプの談話を用いて明らかにした。接続助詞ケドの終助詞用法が相手に turn を譲渡する形式であることは従来指摘されているが(佐藤 1993)、永田(2001)ではそのように turn が譲渡された後、再び turn が返ってくる際に「相手への確認」などの明示的な働きかけがあったかどうかについて、同じく turn を譲渡する形式であり(西原 1993)、トピックの開始や継続に関わる「質問」と比較することにより、次のような結果を得た。

表4 turn が再び返ってくる際の働きかけ表現の有無
(車販売談話)

	ケド(終助詞用法)	質問
働きかけあり	93	28
働きかけなし	29	181

ここから、接続助詞ケドによる終助詞用法はその後の談話展開を完全に相手に委ねるかたちで turn を相手に譲渡する形式であることが明らかになったが、では自由談話の場合はどうであろうか。本稿で用いた自由談話において同様の調査を行った結果が表5である。

表5 turn が再び返ってくる際の働きかけ表現の有無
終助詞用法－質問(自由談話)

	ケド(終助詞用法)	質問
働きかけあり	76	125
働きかけなし	39	456

表5から分かるように、自由談話においても接続助詞ケドの終助詞用法によって turn を譲渡した後、再び turn が返ってくるのは「相手への確認」など、turn 譲渡の明示的な働きかけがあった場合であり、その後の談話展開を委ねていると言える。

このように接続助詞ケドの終助詞用法による turn の譲渡はその後の談話展開を相手に委ねるといふかたちで行われるが、そのような談話展開は「～ケド。」という形式で turn を譲渡することのみによって生み出されるのではない。例えば、先の例(7)のように、後置的なケドの場合も「～ケド。」という形で turn が譲渡されることがあるが、このような場合のその後の turn-taking について、上と同様の調査を行った結果が表6である。

表6 turn が再び返ってくる際の働きかけ表現の有無
終助詞用法－後置的なケド(自由談話)

	ケド(終助詞用法)	後置的なケド
働きかけあり	76	43
働きかけなし	39	39

表6から分かるように、後置的なケドの場合はその後の turn-taking に関して、終助詞用法のように顕著な違いは見られない。これは後置的なケドの場合にはそれ以前に存在する後件がその後の turn-taking に密接に関わるためであると考えられる。例えば、先の例(7)の場合には「東京タワー真ん中から登るやろ」という「確認」の発話とその後の turn-taking に影響を及ぼしたために「確認」－「答え」という隣接ペアが成立し、明示的な働きかけなしに再び B に turn が返ってきたものと考えられる。

このように、その後の談話展開を相手に委ねるかたちでの turn-taking は「～ケド。」という形式で turn

が譲渡されることのみによって成立するわけではない。永田・大浜(2001)で述べたように、終助詞用法の後件には「何も発話しない」という行為が存在し、そのような行為を行った場合に生じるであろう想定が前件によって「抑制」されると考えられるが、その後の談話展開を委ねるといふ turn の譲渡はそのような「何も発話しない」という後件が解釈され、イニシアティブをとることが求められているということが伝達されることによって生じるものであると考えられる。

いま、接続助詞ケドの終助詞用法と turn-taking との関わりについて見たが、このような turn-taking に関する特徴を踏まえれば、表2-6に見たような、トピックの開始位置における終助詞用法の出現数がわずかであることについても説明することが出来るであろう。上に見たように、接続助詞ケドの終助詞用法による turn の譲渡はその後の談話展開を相手に委ねるといふかたちで行われるが、そのような turn の譲渡を行うためには、その後の談話展開を委ねることが可能な状態に相手があることが明らかでなければならない。次の例(8)は自由談話の主要位置に終助詞用法が現れている例であるが、この例においては終助詞用法が現れる以前に、A が話題となっている飲み屋でアルバイトをしていたことが伝えられている。

(8) B: ○○で働いてたんですか?

A: うん、そうそう

B: あ、○○行きます、たまに

A: あ、本当

B: はい

A: そこそこいいでしょ

B: あそこ美味しいですよ(ね)、料理も、雰囲気もすごくいいし

A: そうそう

B: 女性客に人気じゃないですか? あそこ

A: そうね、だからね(ね)、一人で行ってるとね、周り女の子(ばかりですよ)連れかカップルかどっちかだから(あー)、俺は何しとんやろなって、(ふふふ)

B: うーん、しかも今の時期多分すごく多いですよ(ね(そうそうそう)、なんか予約がいっぱいって聞いたんです(けど)

A: そうなんよ(へー)、だから、ま、でも、ね、だんだん、一人で飲んでで客増えたらしょうがないカウンターの中入ろうとか、(ふふ(ふふふ)) ふうふ

このように、情報がある程度与えられている主要位置においては相手にその後の談話展開を委ねることが可能であるが、トピックの開始位置においては相手が

それに関する情報を持っているか否かが未知であるために、そのように委ねることは出来ない。

ただし、同じくトピックの開始位置であっても、車販売談話のような場合には、車についての知識に差があることが明らかであるために、客は店員にその後の談話展開を委ねることが出来る。従って、表7のように、トピックの開始位置に31の終助詞用法が見られる(永田 2001参照)。

表7 車販売談話における終助詞用法の出現位置別の出現数

開始部	主要部			終結部
	開始位置	主要位置	終結位置	
9	31	76	5	0

以上、見てきたように、接続助詞ケドの終助詞用法が自由談話のトピックの開始位置にほとんど見られないという特徴は、その後の談話展開を相手に委ねるといふ turn-taking に関する特徴と、自由談話における参加者の役割関係から生じるものであると考えられる。

5. まとめ

本稿においては談話内での出現位置から接続助詞ケドの各用法が談話展開にどのように関わるかについて見てきたが、「否定」される想定の種類と「否定」のされ方(「棄却」あるいは「抑制」)によって談話展開への関わり方が異なることが明らかになった。最後に本稿で明らかにしたことをまとめておく。

- 1) 文脈上呼び出し可能性が高められている想定が棄却されるという特徴を持つ逆接用法と対比用法はトピックの開始に関わる部分には見られない。
- 2) 当該文脈で述べた場合に生じるであろう想定を抑制する前置き用法や提題用法は逆接、対比用法とは対照的にトピックの開始に関わる部分に見られる。また、提題用法の場合には抑制される想定がトピックに特定されているという特徴から、出現位置が限定されている。
- 3) ケド節が独立的に用いられる挿入用法と終助詞用法はともにトピックの開始位置にはほとんど見られない。これは「思いついたところでケド節が提示される」、「その後の談話展開を完全に相手に委ねる」という特徴を各々の用法が持つためであると考えられる。

本稿では自由談話を分析資料として考察を行ったが、本稿で明らかになった各用法の談話展開への関わり方

が「自由談話」というタイプの談話に特有のものであるのかどうかを明らかにするために、今後は他のタイプの談話についても検討してみる必要があるであろう。

注

- 1) 本稿においてはケレド、ケレドモ、さらに文体的には異なるが、ケドとほぼ同様の機能を持つと思われる接続助詞ガについても考察対象に含める。
- 2) 例文中、無意味語(えー、あの一、など)は〔 〕で囲み、発話中の相手のあいづち、あるいはオーバーラップした発声は { } で囲んである。
- 3) 筆者以外の分析者は分析者 X (22才、女性)、分析者 Y (22才、女性) の2名である。

参考文献

- 才田いずみ・小松紀子・小出慶一(1984)「表現としての注釈 その機能と位置づけ」『日本語教育』52 19-31.
- 佐藤藤紀子(1993)「言いさし「…が/けど」の機能—ビデオ教材の分析を通じて—」『東北大学留学生センター紀要』1 39-48.
- 杉戸清樹・沢木幹栄(1979)「言語行動の記述—買い物行動における話しことばの諸側面—」『言語と行動』南不二男(編)大修館書店 Pp. 271-319.
- 永田良太(2001)「接続助詞ケドによる言いさし表現の談話展開機能」『社会言語科学』第3巻 第2号 17-26.
- 永田良太・大浜るい子(2001)「接続助詞ケドの用法間の関係について—発話場面に着目して—」『日本語教育』110号 62-71.
- 西原鈴子(1991)「会話の turn-taking における日常的推論」『日本語学』10 10-18.
- 橋内武(1988)「会話のしくみを探る」『日本語学』7 43-51.
- 村上恵・熊取谷哲夫(1995)「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62 101-111.
- 山崎深雪(1998)「接続助詞ガの談話機能について」『広島大学教育学部紀要』第二部 47 229-238.
- Schegloff, E. & Sacks, H. (1972) Opening up closings. *Semiotica*, 7 289-327. 北澤裕・西阪仰訳(1995)「会話はどのように終了されるのか」『日常性の解剖学』マルジュ社 Pp. 177-241.

(指導教官：大浜るい子)